疼痛感覚表現用語の分析（その3）

——比喩表現収集の試み——

八 木 孝 彦　上 田 雅 夫*

心理学的な他の研究も同様であろうが，疼痛感覚の表現用語を分析，研究しようとするとき，予め全体的な見通しをもつことが必要になってくる。

人間が侵害刺激によって組織が損傷されて疼痛を知覚したとき，どのような言葉を使用してそれを表現するのか，に関する全体的見通しであり，これから研究を進めていく上での前提となるものである。

筆者ら（八木，et al.,1981）はすでに予備調査にもとずき，この前提らしきものを提示しているが，今回比喩表現の分析を開始するにあたって，ここで再度議論をし前稿に加筆しておきたい。

疼痛表現用語について

疼痛を表現する用語を少し注意深く見ていくと，疼痛そのものを表現する用語と疼痛に対する反応を表現する用語があることがわかる。前者の疼痛そのものの表現とは，疼痛の感覚の表現であり，後者は疼痛によって喚起された情動反応が中心である。

疼痛表現用語についてだけでなく，広く疼痛について研究するとき，疼痛感覚（pain sensations）と疼痛反応（pain reactions）に別けて考えるのはかなり一般的になってきている。たとえば Beecher（1956）は疼痛を感覚成分と反応成分にわけ，感覚成分とは，侵害刺激によって生じた疼痛感覚そのものであり，反応成分とは主に情動行動であると述べている。

この区別は研究を進めていくうえでの概念としては有効であり，また疼痛感覚の有無を報告するような精神物理学的測定などにおいても有用であるが，疼痛を表わす具体的な言葉になると，それが疼痛感覚を表現したものなのか，それとも疼痛反応を表現したものであるのかを判断するのはかなりの困難を伴う。したがって，疼痛表現用語については，疼痛感覚を表現する用語の集合と，疼痛反応を表現する用語の集合があり，両集合はかなり大きな共通部分を有していると考えるのが妥当であろう。

その共通部分に含まれる表現用語も，子細に見ていくと，主として疼痛感覚を表現しながら僅かに疼痛反応の表現を含んでいるものから，逆に主として疼痛反応を表現しながら，僅かに疼痛感覚を表現しているものまで存在している。

* 早稲田大学体育局

このように考えてくると，出発点に立ち戻って，疼痛表現を疼痛感覚表現と疼痛反応表現に分類することの意味が問われるかもしれないが，研究を進める概念的枠組としては必要かつ有効な視点であることに変わりない。

さて次に，疼痛感覚及びその表現について検討しておきたい。

まず疼痛感覚は，他の諸感覚と同様に，その内容，性質といった qualitative な側面と，程度，強度といった quantitative な側面をもつものと想定される。したがって疼痛感覚の表現法もまた，内容，性質といった定性的側面を表現する用語と，程度や強度といった定量的側面を主として表現する用語ないし表現法が存在する。

一つの表現用語ないし表現が，疼痛の内容や性質と疼痛の程度や強度の両側面を同時に表現することがあるのは，前述の疼痛感覚と疼痛反応の場合と同様である。むしろこの両側面を表現する用語が，疼痛感覚の表現用語の中で高い割合を占めるものと予想される。

これまでの簡単な議論を要約しておこう。疼痛を表現する用語は疼痛感覚を表現する用語集合と疼痛反応（主として情動反応）を表現する用語の集合にわけられ，しかも両集合はかなりの共通部分を有している。次に疼痛感覚を表現する集合は，疼痛の内容や性質を表現する用語の集合と疼痛の程度や強度を表現する用語の集合を包摂している。包摂されている２つの集合も重なりあい，共通部分を有していると考えられた。

表現方法からみた疼痛感覚表現用語

疼痛感覚を表現するのに使用される表現方法は，八木，et al.（1981）によって４種類に分類されているが，今回再検討し若干の修正を加えたい。主たる変更は，「程度・行動表現」というカテゴリーを消し，「直接修飾表現」と，「その他の表現」を追加したことである。その結果，疼痛感覚表現用語はその表現方法から次の５種類に分類されることになった。

1） 擬態語表現
2） 比喩表現
3） 比喩―擬態語併用表現
4） 直接修飾表現
5） そ の 他

まず擬態語表現であるが，自由記述法で健常者を対象に疼痛感覚表現用語の収集調査を実施すると，調査によって変動するが，全表現用語の中で，３割から多いと半数を越える割合を占めるほど，よく使用される表現方法である。また慢性疼痛患者を対象とした１～２の調査（八木，et al. 1979；八尋，八木，1983）でも同様の傾回が窺える。

いうまでもなく擬態語とは，音，声，動作，状態，心理作用などを直観的，感覚的に音で描写するものであるが，その表現方法は多種多様で，専門書によっても分類がかならずしも一致していない様子である。

---

* 擬態語という呼びかたについては種々論議があり，さまざまな別の名称が使用されている。擬態語のかわりに擬容語という名前が使用されたり，擬音語・擬態語をひとまとめにして「象徴辞」「描写詞」と称することもある。擬音語と擬態語をあわせて擬声語と呼ぶこともある。本稿では，国語学の領域で一致をみていないこと，代替する名称がポピュラーでないことから，そのまま「擬態語」とした。

浅野（1979）は，擬音語・擬態語の形態を拍数を基本に語根を加えて整理し，18種類としている。それに対して天沼（1978）は，拍数を基本に，音の違いを規準として分類し，4拍のものまでで31型式に別けている。

いずれにせよ拍数を基本におくことに変わりなく，その点に注目すると，日本語の擬態語の中で最も多いものは4拍の畳語形式（天沼，1978，p.32）であるという。畳語とは同一の単語を重ねて一語とした語であり，4拍の畳語とは2拍の要素を反復して使用するものである。

当然のことながら疼痛感覚を表現する擬態語も4拍の畳語が極めて多く，若干の危険性を伴うが，4拍の畳語を中心に網羅しておけば，疼痛感覚の擬態語表現はほぼカバーできると考えられた。この観点に立って実施されたのが，八木，et al.（1981，1983）である。

次に比喩表現についてであるが，ここでは疼痛感覚を表現するのに，たとえを用いて表わす表現技法と簡単に定義するに留めたい。次の項で若干詳しく検討する予定である。

第3番目の表現形式は，前述の2つの表現法，擬態語表現と比喩表現を併用したものである。スタイルとしては擬態語表現が先にきて，後に比喩表現がくるもの，逆に，先に比喩表現がきて，あとに擬態語表現が続くものの2通りあるが，意味的にはいずれでも差異はなさそうである。重要なのは，全ての擬態語表現と比喩表現がリンクするかどうかである。疼痛感覚は主観的体験であって，その内容を言語化しにくい性質をもっているので，もし個々の擬態語表現と比喩表現の結びつきが確定できれば，より豊富な表現が可能であるし，表現用語の整理もその目標にむかって進めることになろう。ただ現段階では，その可能性の有無を速断する必要はなく，擬態語表現と比喩表現を別々に収集した後に再度検討すべき課題といえる。

次の分類は直接修飾表現である。前報告（八木，et al. 1979）ではこのカテゴリーはなく，「程度・行動表現」という名称でくくられたグループが存在した。前報告のこの名称は，他の分類が表現方法によるものであったのに対して，これだけが表現内容からつけられたものであり，全体の分類規準からして妥当でなかったと考えられた。

直接修飾表現というのは，具体的には，疼痛感覚の内容や強度を形容詞や副詞を使って限定，もしくは表現する方法である。いま被修飾語が名詞とすると，形容詞を使って形容するわけであり，一般的には，その名詞を説明するのに最も多く使用される表現方法であろう。

疼痛感覚の内容や性質，その強度を表現するのにもこの方法があるが，その数は極めて少なく日本語においても未発達といわなければならない。参考までにその一例をあげると，鈍い痛み，鋭い痛み……。

最後のその他のカテゴリーは，いまだよく整理されていないが，前記4種以外の表現法か含まれることになる。前記4種以外の表現法としては，一つは漢語表現がある。仙痛（さしこむ痛み），疼痛（狭義でうずく痛み），鈍痛……など。もう一つは，病名や怪我の名前を冠する表現である。盲腸の時の痛み，歯が痛いときのあの痛み，二日酔いのときの頭痛……などに観察される。後者は，内容的には先の比喩表現にも分類できるが後に検討する比喩表現の条件と異なるところがあり，このカテゴリーに分類された。

比喩表現について

国立国語研究所（1980）は比喩を定義して，「比喩とは，表現主体が，表現対象を，それを過不足なく直接にさし示す言語形成を使わないで，その代りに，言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し，その言語的環境との違和感や，それが現われることの文脈上の意外性などで，受容主体の想像力を刺激して，両者の共通点を推測させることによって，間接的に伝える表現技法である」としている。

疼痛感覚の表現法としての比喩表現はこの定義と若干事情が異なってくる。すなわち，疼痛感覚という表現対象を過不足なく直接さし示す言語形式は日本語には存在しないか，存在しても極めて貧困な現状である。疼痛感覚に限定すれば，擬態語表現とともに比喩表現こそ，それを過不足なくさし示す言語形式といえるかもしれない。

次に比喩表現の分類であるが，中村（1979）によると次の分類をしている。

1）指標比喩
2）結合比喩
3）文脈比喩

疼痛感覚の表現に使用されるのは，圧倒的に指標比喩である。指標比喩とは，「読者が表現者の比喩意識を感じとる特定の言語形式をもつ比喩」（中村，1979）であるが，具体的には次のような表現形式のものである。「ちょうど……よう」，「まるで……でも……よう」，「いわば……よう……思われる」，「どこか……似る」，「あたかも……よう……ぐあい」，「……が……なら……は……だ」。

ちなみに結合比喩とは，ことばとことばの結びつきがふつうのケースとは異なり，言語上の論理的な飛躍が感じられるという種類のものであり，その言語単位が文章以上になると文脈比喩と定義され分類されている（中村，1979）。

本題にもどり，疼痛感覚の比喩表現が形式的には指標比喩であるとして，他の特徴はなんであろうか。一つはやはり形式面にその特徴を有し，もう一つは内容面に特徴が認められる。

もう一つの形式面での特徴とは，比喩の中に動詞を折り込むことである。動詞は吉竹（1983）にも引用されているとうり，時間軸上での変化を表現するとき使用される品詞であり，静止し，固定して変化しない特徴をとらえる形容詞とは性質を異にしている。

「キリで刺すように痛い」「電気が走るような痛み」「万力で締めつけるように痛い」……など表現例をあげるまでもなく，疼痛の比喩表現には動詞が折り込まれていることがわかる。もちろん動詞を使用しない表現も使用される。“歯痛のような”“盲腸のときのような”……などであるが，日常使用される率は低いといえる。

最後の内容面の特徴であるが，それは中村（1979）のいうカテゴリーの転換に該当する。疼痛感覚というカテゴリーの事象を，どの世界のどのカテゴリーの事象にたとえをもとめているのか。

結論だけ述べるならば，それは，物理的，化学的，電気的な世界での事象に多くたとえを求めているようである。今後，疼痛感覚とその比喩との共通性，比喩のレベルなど，その整理を継続していく考えである。

調　査 1

国立国語研究所（1982）の「分類語彙表*」の“用の類**”の語を，疼痛感覚の内容や性質を比喩的に表現する時に一般に使用する様式にしたてる。仕立て上げた語をランダムに配列した調査票を作成し，調査を実施。その中から，疼痛感覚を表現するのに適切なものを抽出することを目的とする。

方　法

国立国語研究所（1982）「分類語彙表」“用の類”より全ての語（ただし日本語表現として奇異なものは除いて）を，連体形に変え，それに比況の助動詞「ようだ」の連体形「ような」，さらに「痛み」を加えた語を作成した。

（例）焼ける

焼ける（連体形）＋ ような（比況の助動詞連体形）＋ 痛み ＝ 焼けるような痛み

作成された語は総計2,900語になったが，それらをランニダムに配列した調査票を作成し，「痛みを表現する語としてふさわしいと思うものに○印を記入して下さい」と教示した。被調査査は女子短大生で延45名，1語につき20名の回答を得た。

結　果

2,900語の中から，疼痛感覚を表現する用語としてふさわしいと判断されたのは次のようなものである。20名中17名が○印を記入した，一致率85％の用語は「かきむしるような」「うずくような」「ひきつるような」の3語。一致率75％の用語は「ねじれるような」「死ぬような」「切りさくような」の3語。一致率70％は「つるような」「むしりとるような」の2語である（ここで一致率とは，分母に回答者数の20を，分子には○印を記入した回答者数を代入して算出したものである）。

この調査の目的は，疼痛感覚表現用語を収集するための出発点であり，同時に網目の粗いスクリーニングを実施することにあった。2,900語から何語を抽出して次の調査に送るのかが問題となったが，今後の調査を考えて，一致率25％，すなわち，20名中の5名が○印を記入した語を残すことにした。こうして次の調査にかけられることになった表現数は277個となった。

---

* この分類語彙表に収められている語は『およそ三万二千六百語である。これらの語は，国立国語研究所報告21「現代雑誌九十種の用語用字」第一分（1962）冊の語彙表に掲げる高使用率の語のうち，人名，会社名，球団名等の個別の名，および記号の類を除く約七千語を中心とし，それにつづく使用率をもつ約五千語を補い，……』（国立国語研究所　1982，p.7）

** 用の類とは分類語彙表の大分類の一つで，動詞の仲間のことである。《ある》に関連するもののほか，《どうする，どうなる》等の語が収められている。用の類の以外の大分類としては，名詞の仲間の体の類，形容詞の仲間の相の類，そしてその他の仲間がある。

表 1-a　疼痛感覚の比喩表現

順位	疼痛表現	M	SD	Aスコア	Bスコア	順位	疼痛表現	M	SD	Aスコア	Bスコア
1	のたうちまわるような	5.79	1.67	0	0	36	つぶれるような	4.35	1.81	8	10
2	泣き叫ぶような	5.52	1.74	42	10	37	ひねりまわすような	4.33	1.84	18	10
3	死ぬような	5.49	1.82	47	14	38	突くような	4.32	1.79	0	0
4	うめくような	5.47	1.58	19	6	39	きりきざむような	4.30	2.05	5	3
5	切りさくような	5.40	1.64	0	0	40	もげるような	4.26	1.86	4	4
6	さすような	5.39	1.71	0	1	41	ぶつような	4.23	1.70	25	14
7	ころげまわるような	5.34	1.82	0	1	41	切りつけるような	4.23	1.88	0	1
8	つきさすような	5.25	1.77	0	0	43	やきつけるような	4.20	1.93	0	1
8	とび上がるような	5.25	1.91	3	2	43	つき通るような	4.20	2.00	0	3
10	かきむしるような	5.20	1.79	3	2	45	うごめくような	4.15	2.11	50	12
11	張り裂けるような	5.17	1.92	0	0	46	たたくような	4.14	1.73	6	2
12	うずくまるような	5.10	1.63	10	5	47	かみきるような	4.13	1.99	3	2
13	つるような	5.09	1.80	6	1	48	ちぢみあがるような	4.12	1.91	22	7
13	死に絶えるような	5.09	2.15	71	20	49	たたきつけるような	4.09	1.72	0	4
15	のけぞるような	5.08	1.85	18	6	50	掻き乱すような	4.02	1.83	1	4
16	はいずりまわるような	5.02	1.96	0	3	51	こみあげるような	4.01	1.89	42	13
17	えぐるような	5.0	1.94	0	0	52	ひきつけるような	4.00	1.81	9	4
18	裂くような	4.95	1.92	2	1	52	しみ渡るような	4.00	1.88	32	11
19	やけるような	4.92	1.87	0	0	54	ぶったぎるような	3.99	1.92	15	8
20	もがくような	4.85	1.84	0	4	55	しぼりあげるような	3.98	1.92	17	7
21	うずくような	4.84	1.69	0	0	56	ひねりつぶすような	3.96	1.81	1	1
22	ささるような	4.76	1.85	0	0	56	もぎとるような	3.96	1.87	7	5
22	たまりかねるような	4.76	1.89	32	16	58	折れるような	3.90	1.95	10	3
24	ちぎれるような	4.69	1.70	0	0	59	踏みつけるような	3.89	1.70	4	4
25	しみるような	4.65	1.78	4	2	59	つねるような	3.89	1.85	0	1
25	切れるような	4.65	1.83	0	0	59	かむような	3.89	1.89	11	5
27	ひきさくような	4.61	1.94	0	0	59	そぎとるような	3.89	1.95	5	3
28	しびれるような	4.60	1.59	3	1	63	締めあげるような	3.88	1.89	1	3
29	割れるような	4.59	2.19	5	2	64	つれるような	3.87	1.85	24	7
30	さけるような	4.57	1.81	0	0	64	なぐるような	3.87	1.86	22	13
31	むしるような	4.55	1.91	0	0	66	切り取るような	3.84	1.98	9	7
32	よじるような	4.49	1.84	0	2	66	貫くような	3.84	2.15	22	5
33	むしり取るような	4.37	1.79	5	3	68	なぐりつけるような	3.81	1.89	21	10
33	ねじれるような	4.37	1.96	0	1	68	たまりかねるような	3.81	1.99	40	21
35	ひきつるような	4.36	1.63	0	0	70	くだけるような	3.80	1.89	10	5

表 2-b　疼痛感覚の比喩表現

順位	疼痛表現	M	SD	Aスコア	Bスコア	順位	疼痛表現	M	SD	Aスコア	Bスコア
70	焼き切るような	3.80	1.90	3	4	105	切り開くような	3.51	1.95	9	9
70	よじるような	3.80	1.96	9	4	107	ひねるような	3.48	1.79	0	2
73	ねじ曲げるような	3.78	1.65	3	4	108	圧するような	3.44	1.79	35	11
73	ひねるような	3.78	1.79	2	3	108	ただれるような	3.44	1.83	78	27
75	ひびくような	3.75	1.85	21	12	110	しみ通るような	3.42	1.76	37	9
76	押しつぶすような	3.74	1.70	5	3	111	貫くような	3.41	2.08	3	4
77	ひっかくような	3.73	1.75	2	2	112	切り離すような	3.40	1.77	12	6
77	打つような	3.73	1.81	0	0	113	かきまわすような	3.37	1.67	30	12
77	焼くような	3.73	1.87	2	2	113	切りつめるような	3.37	1.76	40	11
80	よじるような	3.72	1.85	14	4	113	ひきずりまわすような	3.37	2.11	27	14
81	すりむけるような	3.71	1.74	6	5	116	かみつぶすような	3.35	1.93	22	7
81	ひっぱるような	3.71	1.74	7	1	117	打ち当たるような	3.29	1.75	5	5
83	ひきつるような	3.70	1.80	5	1	117	剝がれるような	3.29	1.94	3	1
83	つつくような	3.70	1.88	8	3	119	はたくような	3.28	1.67	20	10
85	つきあげるような	3.68	1.91	8	3	119	はたくような	3.28	1.67	36	17
86	ひっぱたくような	3.66	1.70	26	10	121	すり切れるような	3.27	1.54	4	1
86	かき乱すような	3.66	2.02	15	5	122	うちのめすような	3.26	1.74	47	15
88	すりむくような	3.64	1.74	1	1	123	断ち切るような	3.25	1.83	20	13
88	つぶすような	3.64	1.88	9	3	123	傷つくような	3.25	1.92	68	22
90	ぶつけるような	3.62	1.68	12	5	125	傷めるような	3.24	1.53	54	16
90	せきこむような	3.62	1.78	149	36	126	いらだつような	3.22	1.72	81	26
90	ちょんぎるような	3.62	1.93	28	10	127	押さえるような	3.19	1.51	28	10
93	つきやぶるような	3.61	1.89	0	0	128	のしかかるような	3.18	1.63	24	17
94	押さえつけるような	3.60	1.73	3	3	129	破れるような	3.16	1.76	0	5
95	剝ぎとるような	3.59	1.83	0	2	130	握りつぶすような	3.15	1.60	19	11
96	ねじるような	3.58	1.77	6	1	131	つまむような	3.12	1.70	40	12
96	そり落とすような	3.58	2.03	30	15	132	ちぢこまるような	3.11	1.69	7	6
98	引きずるような	3.57	1.87	10	11	133	こわれるような	3.10	1.82	106	29
99	斬り込むような	3.56	1.94	4	3	134	むけるような	3.08	1.71	3	3
100	つっつくような	3.55	1.75	7	4	134	すりつぶすような	3.08	1.78	38	12
100	はぐような	3.55	1.92	19	8	136	縮まるような	3.06	1.69	17	10
100	つんざくような	3.55	1.96	9	8	137	ほじくるような	3.02	1.83	45	15
103	叩き切るような	3.53	1.85	1	3	138	破けるような	3.01	1.72	4	4
103	ぶんなぐるような	3.53	1.88	75	25	139	かきまわすような	3.00	1.79	96	24
105	はちきれるような	3.51	1.89	28	9	139	投げつけるような	3.00	1.84	59	27

調　査 2

調査１を通過してきた277表現に対して，さらに疼痛感覚を表現する用語として適切かどうかの検討を行うことを目的として，調査２を実施した。

方　法

調査１で20名中５名以上が，疼痛感覚表現用語として抽出した277表現をランダムに配列した調査票を作成，疼痛感覚表現用語として適切かどうかの判断を７件法で求めた。被調査者は女子短期大学生100名，調査に要した時間は約20分であった。

結　果

結果の処理は，疼痛感覚表現用語として適切でない～適切に１～７の重みづけをして，平均と標準偏差を算出，高得点の順に並びかえ，表 1-a～b に示した（但し，次の調査３との関連で掲載したのは140位までである）。

結果特徴を数値的にみると，最高得点は，「のたうちまわるような」の5.79。最低得点は「あえぐような」の1.62であった。中央値は139位の「つきやぶるような」の 3.16 であった。高得点の表現を内容的に検討していくと，「のたうちまわるような」「泣き叫ぶような」「死ぬような」「うめくような」といった感情・情動的成分の強い表現が多く，疼痛の感覚というより，疼痛反応と解される表現が多い。疼痛感覚の表現としては，「切りさくような」「さすような」「つきさすような」などが高い順位で適切と評価されている。

調　査 3

調査１，２のスクリーニングを経てきた表現に対して，これまでとは逆の，疼痛感覚表現として適切でないものを抽出する調査を実施して，さらに表現を厳選していくことを目的にする。具体的には，調査２の結果から高得点の表現を選びだし，ランダムに配列した調査票を作成する。被調査者にはリストの中から疼痛感覚を表現するのに適切でないものを抽出して下さいと教示した。

方　法

調査２の結果より，平均値が3.0以上の表現，211箇を抜き出した。それらの中には，疼痛感覚の表現として明らかに適当でないと思われるものが多数含まれていた。そこで，平均値が5.0以上の表現は議論することなく残すことにし，それ未満の表現に関しては，日本語として，また疼痛表現として明らかに適当でないもの（例，青ざめるような，腹ばうような，涙ぐむような）は削除した。さらに調査の信頼性をチェックするために，７語については，重復して使用することにし，合計 140 表現を調査票にランダムに配列した。

教示は「この中から痛みを表現する用語として不適切なものを10個選んで下さい。もし10個で足りないときは，それ以上になってもかまいません」……「次に，さきほど　印をつけたものの中から，さらに痛みを表現するのに不適切な表現７個を選び，不適切な順に１～７まで順位をつけて下さい」

被調査者は看護学校１年生84名，男性４名が含まれている。回答所要時間は約15分であった。

結　果

結果の処理は，まず不適切と○印を記入された度数をかぞえ，次いで一番不適切と順位をつけたものから７～１と重みづけをし，合計を算出した（表１-a～b のＡスコアはこの合計を，Ｂスコアは○印が記入された度数を表わしている）。

Ａスコアで最高得点は「せきこむような」の 149 点で，Ｂスコアも最大の36を示した。他方，不適切としてチェックされなかった表現は17個あり，チェックされてもＡスコアがゼロなものが14表現ある。表１の中から前者に該当するのは，１位の「のたうちまわるような」，５位の「切りさくような」などであり，後者に該当するのは，６位の「さすような」，７位の「ころげまわるような」などである。

全体討議

調査１，２，３を計画し実施する経過に於て，そして調査結果が出た段階で，幾つかの検討すべき問題が出現してきている。

第１点は，本調査の目的が，できるだけ広汎に疼痛感覚表現を収集することにあったが，本調査の方法がそれに有効であったかどうかである。白紙に立ち戻って考えると，病人で現在疼痛を有訴している患者に，その感覚を報告してもらう調査計画がすぐ思い浮かぶが，著者らは，健康成人を対象として分析を進めて，次のステップとして疼痛有訴患者に研究対象を移す計画であり，その計画のもとでは，本調査の方法はある程度成功していると評価できる。

全体的方向としては有効だと評価できても，具体的なレベルでは……。たとえば，機械的に合成された表現が，日本語としてこなれているとはいいがたく，したがって調査票が厖大で，被調査者の労が多い割には……の議論もあった。調査１の段階で日本語として成立するかどうかの事前調査を実施して，調査にかける表現数を削減しておくべきであったかもしれない。

また，「針で刺したような痛み」という表現も日常よく使用されるが，今回の調査には，そういった手段，又は動作・変化の主体が不在になっている。針で刺したのか，キリで刺したのかによって意味内容が異ってくると予想されるし，日本語にはそういった表現が数多く観察される。変化を紹来した手段・道具を含んだ形での疼痛感覚の表現を収集していく必要がある。

第２点は，調査２，３の方法上の問題と関連している。本調査の目的は疼痛感覚の内容や性質，強度などを表わす表現用語を収集することであるが，表１の結果をみていくと気付く通り，それ以外の表現が数多く含まれてしまっている。それらは主に，侵害刺激によって生じた疼痛感覚の内容や性質ではなく，侵害刺激によって生じた行動，疼痛反応といわれるものである。疼痛感覚の表現として適切かどうかの調査２で，１位にランクされ，不適切な表現を取り除くための調査２でもＢスコアがゼロ（不適切との評価がゼロ）であった「のたうちまわるような」という表現がある。これは，疼痛の内容や性質を表現して

いるというより，痛くて痛くて「のたうちまわる」と解釈できる。

調査２で２，３，４位にランクされた表現用語も同じように考えられるが，調査３においてチェックされている。調査２で７位にランクされ，調査３でＢスコア１の「ころげまわるような」も同様に考えられる。しかし，それらの表現の本質がそうであるとしても，疼痛の程度や苦痛の強度を意味していることも事実である。「ころげまわるような痛み」といえば，それが急性のものであり，激烈なものであることを意味しているからである。

現段階では，これらも含めて疼痛感覚の表現用語と考えているが，狭義にはやはり疼痛反応を表現するものであり，調査目的からは逸脱しているといえる。調査に先だつ教示では，「痛みの内容や性質を表現する用語……」と限定しているにもかかわらず，徹底しないまま回答しているものと考えられる。教示の仕方も含めて，調査方法全体を再検討すべきものと考えている。

第３の問題は，今回の方法で，疼痛感覚の比喩表現が十分に収集できるか否かの見通しである。教示や調査方法を改良したとして，動詞を比況の助動詞に結びつける方法で，はたして日常使用される疼痛感覚の比喩表現を十分に網羅して収集できるか否かの問題である。今の時点では，この方法は基本的には成功であり，改善し工夫すれば本格的調査へと使用できそうであるが，これだけでは限界があり他の方法と併用する必要がありそうである。

参考・引用文献

浅野鶴子（1979）擬音語・擬態語辞典　角川書店
天沼　寧（1978）擬音語・擬態語辞典　東京堂出版
Beecher, H. K. (1959) Measurement of Subjective Responses, Oxford University Press.
国立国語研究所（1980）比喩表現の理論と分類　秀英出版
国立国語研究所（1982）分類語彙表　秀英出版
中村　明（1979）比喩表現辞典　角川書店
八尋華那雄，八木孝彦（1983）慢性リウマチ患者の疼痛感覚表現（未発表）
八木孝彦，林　輝明，前田小三郎（1979）脊髄損傷患者の知覚脱失性疼痛について　日本教育心理学会第21回総会発表論文集
八木孝彦，高沢則美（1981）疼痛感覚表現用語の分析（その１）No. 17　白梅短大紀要
八木孝彦，松本真作，山崎勝男，上田雅夫（1983）疼痛感覚表現用語の分析（その２）No. 19　白梅短大紀要
吉竹　博（1983）日本人の生活と疲労　労働科学研究所

や　ぎ　たかひこ（心理学）
うえだ　ま　さ　お（心理学）

本調査の１，２の原資料は筆者が指導した昭和57年度卒業研究で次の諸氏が実施したものである。小木曽加代子，酒井美和，佐藤美紀子，末田結美，柊崎京子，宮城正江。